

★持続可能な開発を目指す非同盟＝ヘズリ・アドナン

1979年は、国際問題で騒々しい年だった。2月にイランのホメイニ師が権力を手に入れ、2500年続いたペルシア王政をイスラーム神権政治に転換した。同年、66人の米国人がテヘランの米国大使館で、学生たちの一団に人質としてとらえられた。人質解放のため多くの試みがなされたが不首尾に終わり、それによって再選をめざすジミー・カーター米大統領の選挙運動が失敗してしまった。

12月末、ソ連の戦車がカブール南方の僻地に侵入して、長期にわたるソヴィエト・アフガン戦争が始まった。米国は報復としてソ連への穀物販売を遮断した。これはまさに冷たい米ソ対抗の時代だった。「第三世界」のいくつかの国は、自分達が超大国の政治抗争の手先にすぎないことに気が付いた。

キューバのフィデル・カストロ議長が国連総会での演説の後、総立ちの拍手を受けたのには、こうした背景があった。1979年10月12日のことで、フィデルは2時間6分の演説の間、一般に知られているようなキューバの指導者としての発言はまったくしなかった。

その代わり、非同盟運動の議長の資格で演説した。国連の会議場いっぱいの聴衆を前にして、正義、平等、平和にもとづいた新しい世界秩序を求める非同盟運動の熱望をはっきりと述べたのだった。

有名な1955年のバンドン会議以来、非同盟運動の指導者たちは、何世紀にもわたる植民地主義から生じた不公平・不平等な国際体制を転換しようと共同の努力をしてきた。古い秩序の下では、世界の富は少数の大国の手に集中した。その豊かさは、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国の国民の資源を略奪することによって維持された。

非同盟運動の指導者たちは、脱植民地の連帯の精神で帝国主義だけを非難したのではなかった。彼らは、人種差別主義、アパルトヘイト、シオニズムなど、弱小国にたいするいかなる形態の支配をも拒絶した。最も重要なことであるが、彼らは政治思想としての「非同盟」に賛同することによって、冷戦の競争者たちによるいかなる支配をも乗り越えようとした。その哲学的な土台は、平和的共存の概念である。

最盛期には、非同盟運動は国連システムの中での有力な多国間仲介勢力だった。国連の最大の国家グループとしての非同盟運動の主要な関心事には、軍縮、平和維持、国連の再編成と活性化、国際的な経済発展などがある。

世界的な環境問題に対処しようという呼びかけは、早くも1972年、ギニアのジョージタウンで開かれた非同盟諸国外相会議で、注目を集め始めた。1973年のアルジェでの非同盟諸国首脳会議はさらに一步をすすめて、環境保護の問題での発展途上国と先進国と技術的協力を呼びかけた。

しかし1970年代以降、冷戦終結にともなって地政学的な現実は著しく変化した。ソ連の崩壊、ドイツの再統一、ワルシャワ条約機構の解体は国際的な秩序を容赦無く一変させた。1990年代・2000年代を通しての米国の一国覇権につながった。その結果今度は、米国による支配で国際政治における一つの思想としての非同盟が弱体化してしまった。その後は、非同盟運動をノスタルジックな過去の遺物とあざ笑う人も多かった。

別の人々は、非同盟運動がなお確実に、戦略的環境の発展にとって意味をもっているとの信頼を持ち続けた。2003年、マレーシアが第13回非同盟諸国首脳会議を主催した際、参加諸国は、非同盟運動の再活性化に関するクアラルンプール宣言を発表した。

首脳会議が止めようとしたのは、単独行動主義へ向かう風潮だった。宣言はその代わりに多国間プロセスの強化を提案し、非同盟運動と国連参加国の利益を守る手段とした。

国連総会でのカストロの熱烈な演説から40年が経過した2019年の初頭、私たちは再び世界的に不確実な地点に戻ってきている。私たちは南北、東西という二分法が明確さを失いつつある時代に生きているが、米国による国際自由主義体制の衰退は、米中対立という新しい時代の到来を告げている。

アーサー・ロバート・D. カプランは、最近の *Foreign Policy* の記事の中で、米中の戦略的競争を新しい「冷戦」として率直に評している。その上、軍事同盟が再び流行するなか、非同盟運動のようなブロックや連合はますます時代遅れと見なされている。一層悪いことに、2019年の世界経済の成長は減速が予想されており、おそらく貿易制限がエスカレートしそうだ。

世界銀行の概観は、2018年にいくつかの大きな新興国市場で起きた金融ストレスが長引くかもしれないと指摘する。自然環境の分野では、気候学者たちがエル・ニーニョ現象で2019年は記録的な温さになると予測している。

私たちは、さらに多くの猛暑、野火、干ばつ、暴風雨、洪水に対処しなければならないだろう。しかし実際の行動は限られたものになるとみられる。交渉の当事者たちがますます古臭くなった先進国と発展途上国の二分法にとらわれすぎているからだ。

最悪の状況が始まろうとしている時に、国際社会はもう一度、平和的共存の必要性を強く訴えなければならない。非同盟運動は形式ばらない性格を持つから参加国は個別的に行動をとることができるが、一方世界のより大きなビジョンについての共同行動を追求している。

すでに2018年、正しい方向にむけた一歩が始まった。アゼルバイジャンのバクーでおこなわれた第18回非同盟諸国中間閣僚会議は、「持続可能な発展にむけた国際の平和と安全の促進」を主題に選んだ。

バクー宣言はさらに、「持続可能な開発のための国連2030アジェンダ」の完全な履行に対する各国の決意を表明した。非同盟運動は、それにふさわしい努力によって、諸国民の間での平和・協力・友好の勢力としての役割を取り戻すことができる。

(NNN=ベルナマ通信)